



# 巨大環濠集落 下之郷遺跡

守山市教育委員会

主任 川畑 和弘

## はじめに

鈴鹿山系に源を発する野洲川の下流域には、県下最大の沖積平野が広がっています。今からおよそ2100年前、その平野の中央部に、巨大な環濠集落下之郷遺跡が築かれています。「環濠集落」とは、周囲に大溝をめぐらしたムラのことです。弥生時代の前期から後期にかけてのほぼ全期間にわたって、このような集落形態が認められています。弥生時代の環濠集落は、1～2条の環濠をめぐらすものが一般的で、環濠の中に水をたたえた「水濠」タイプと水をもたない「空濠」タイプの2種があります。

下之郷遺跡の環濠は、ムラの周りを1条だけでなく、最低3条、多い場所では8～9条もの濠が掘られ、中には水が張られていたことがわかっています。

## 《調査でわかった集落の大きさ》

下之郷遺跡の調査のきっかけは、昭和55年の公共下水道工事の立会調査で、弥生土器の破片と小溝が発見されたことに始まります。

昭和59年に行なわれた都市計画道路建設に伴う発掘調査では、弥生時代中期後葉の大溝が3条並行する状態で検出され、その中から大量の弥生土器が出土し、環濠集落の存在が予測されるようになりました。その後、昭和62年には工場増築工事の際に南側環濠が、平成6年には下水道工事で北側の環濠が調査され、環濠集落の規模は、南北の径がおよそ300mを超えるものと考えられるようになりました。そして、平成9年の調査では遺跡の北東



下之郷遺跡の環濠

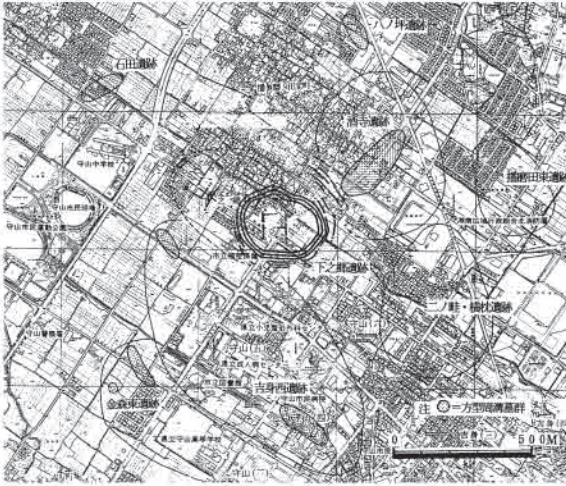
側で6条の環濠が確認され、過去に見つかったものと合わせると9条もの環濠が掘られていることが判明しました。それから、平成13年の調査では、これまでにわかっていた西側の環濠のさらに外側260mの場所で環濠2条（外環濠）が検出されたことから、遺跡の全体規模は、東西670m、南北460mで、全体面積がおよそ25ヘクタールにもおよぶことが推定されるようになりました。

そして、平成14年3月には新たに国の史跡に指定されました。

## 《周辺遺跡との関係》

下之郷遺跡は弥生時代中期後葉（近畿第Ⅳ様式）に成立した遺跡です。中期後葉はさらに3つの小期に分けられ、環濠集落はその古、中段階に盛期が認められます。新段階になると、環濠は埋もれはじめ、集落は衰退していきます。

これに代わって下之郷遺跡の東側500mの場所に播磨田東遺跡が、南東300mの場所に二ノ畦・横枕遺跡が成立し、展開しはじめます。しかし、弥生時代後期になると、これら



周辺遺跡地図（下之郷遺跡の環濠と墓の位置）

の3つの環濠集落はすべて消滅し、周辺では環濠を持たない小集落が展開していくこととなります。

一方、これらの集落に対応する墓群として周辺に方形周溝墓が造られています。方形周溝墓とは、四角く溝をめぐらし内側に低丘を盛り上げ、その中央部に土坑を掘って遺体を埋葬する墓のことです。下之郷遺跡周辺で発見されるものは、一辺が10m前後のものが普通で、環濠の外側に10基以上で2列に並んだ状態で造られているようです。これまでに、吉身西遺跡で2箇所、酒寺遺跡、八ノ坪遺跡、石田遺跡、金森東遺跡などで墓群が発見されており、下之郷遺跡で生活していた人達が分散して墓域を形成していたものと考えられます。

### 《環濠・土橋・柵》

弥生時代の集落に見られる環濠は何のために掘られたのか？という問題については、古くから議論があります。例えば、田んぼに水を導くための灌漑用水路。また、水害よけの防災施設。集落の水はけや排水の役目。それから、戦乱などによる外敵の侵入を防ぐための防御施設。居住域と外界を結界するための境界ライン。木製品を加工する際の貯木場。などがそれにあたります。

下之郷遺跡の立地する場所は、地下水位が非常に高く、最近まで自然の湧水地が近辺に存在していたことから、弥生時代においても豊富な水に恵まれたムラだったことが想定されます。実際の調査でも環濠内に水を湛えていたことが明らかになっています。この点からすると、下之郷遺跡の場合、環濠と水は切り離しては考えられないものだと思います。下之郷遺跡の環濠の規模は、幅が4～8m、深さが1～2mを測り、どの地点でも人が一足跳びにはできない規模をもっています。平成8年におこなった集落西側の調査では、土橋状の出入口が発見されました。出入口は、環濠の一部を土で埋戻し、通路状に整え、その両側に堅固な柵や門柱を立てて築かれました。そして見つかった出入口の周辺からは、銅剣をはじめ、磨製石剣、打製や磨製の石鏃、焼け折れた弓などが多数出土しました。出入口の周辺を堅固に防御し、実際に戦いが行なわれていた様子が目に浮かぶようです。

### 《戦いの道具》

戦闘を物語る場所以外にも、実際に使用された戦いの道具がたくさん発見されています。

#### \*磨製石鏃と打製石鏃

多量の石鏃が発見されていますが、数量的には打製石鏃が上まわっています。打製石鏃にはサヌカイトが、磨製石鏃には粘板岩や頁岩などが材料にされています。



戦いの道具（写真上より、戈の柄・盾・弓・銅剣・石剣・石鏃・環石・環状石斧）

<sup>かんじょうせき ふ かんせき</sup>  
\*環状石斧・環石(直径約10cm)

石をドーナツ形やソロバン玉形に磨きあげたもので、中央の穴に棒を通し、戦時の際などに棍棒<sup>こんぼう</sup>として使用されたものです。

\*弓<sup>ゆみ</sup>

これまでに10本ほどの弓が、環濠から出土しています。イヌガヤなど弾力のある樹木が丸木<sup>まるし</sup>で使われています。装飾には、樺<sup>かば</sup>が巻かれたり、漆を全面に塗布したものなどがあります。

\*銅剣<sup>どうけん</sup>(残存長23.4cm)

環濠の底より出土しています。切先が折れたものを再び研ぎ出しており、刃部は非常に鋭利に仕上げられています。強い衝撃により突起部より下端、茎の部分を破損しています。

\*戈<sup>か</sup>の柄<sup>え</sup>(長さ56cm)

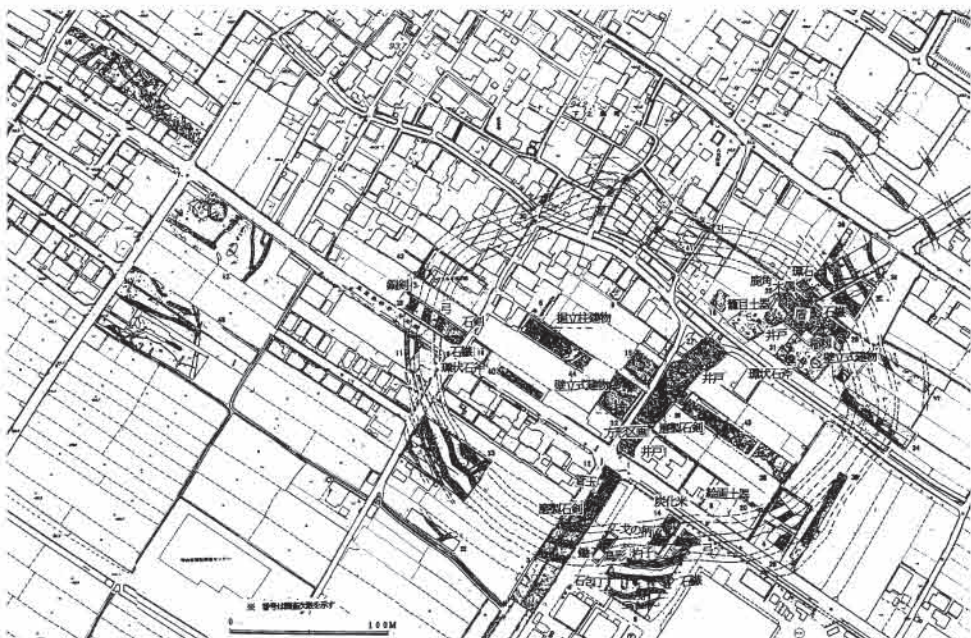
戈は中国、戦国時代に戦車戦などで活用された武器の一種です。中国のものは長柄ですが、日本のものは短柄で片手で持つことが出来ます。下之郷遺跡の環濠からは、ヒノキ材をていねいに削り上げて作ったものが出土しています。柄尻には突起を設け握りやすくなっており、柄頭には溝孔が彫られています。溝孔の形状から青銅製の戈が装着されていたものと考えられます。

<sup>たて</sup>  
\*盾(長さ105cm 幅上端で36cm)

スギ板4枚とサカキの補強材2本とを組み合わせて作られた盾です。表板の中央部には四角い2対のすかし孔<sup>あな</sup>が開けられています。補強材には縦列に小孔を開け、そこに植物繊維を燃った紐を通して表板と綴じ合せています。表板に通した二本の補強材の中央には横位に把手が付けられています。盾には、置き盾と持ち盾の2種がありますが、本盾は表板中央に脚棒の差込孔が設けられており、置き盾としての使用が想定されます。また把手の存在を勘案すると持ち盾としても利用されたのでしょうか。

この盾については、実年代資料としても重要な意味があります。この盾の表板は、四枚のスギ板を組合せて製作されていますが、その板材を年輪年代測定法によって分析した結果、推定伐採年代が紀元前200年頃のものであることが判明しました。年輪年代測定結果は、転用材や再利用なども考慮したうえで評価しないといけませんが、遺跡の存在した実年代を検討するうえで、重要な成果だといえます。

下之郷遺跡全体図



## 《集落の中央部》

丸い形をした環濠集落の中央部には、南北に延びる溝と東西に延びる溝で四角く囲まれた場所が確認されています。囲みの中からは、棟を南北方向にして建てられた大型建物が見つかりました。建物は、同じ場所で5回も建替えられていて、最も大きく発達した段階の建物は、棟持柱を持つ細長い高床建物（1間×6間）で床面積が約56㎡を測ります。

環濠の内部に区画溝を設ける集落は非常に少ないのですが、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や兵庫県の加茂遺跡、大阪府の池上・曾根遺跡、奈良県の唐古・鍵遺跡などで見ることができます。いずれも、平野の中では、中心的な巨大環濠集落にあたります。それらの区画は「まつりや儀式をした場所」「首長層の居宅」「ムラの共同倉庫を囲むもの」など色々な意見にわかれますが、ムラのなかでも大変重要な場所であったことが推測されます。

下之郷遺跡の環濠内部の調査は、はじまったばかりで、方形区画の広がりやその内部の建物配置、構成など課題が山積しています。

近江湖南地域の弥生時代集落の動きを時間の推移のなかでたどってみると、稲作のはじまった弥生時代前期の集落は琵琶湖のほとりや河川活動が活発な地域（自然堤防帯）に所在しています。ところが、この下之郷遺跡を出発点にして弥生時代中期後葉になると、平野の内陸部（扇状地）に集落が進出していくこととなります。後続する集落には播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡、山田町遺跡があります。いずれも環濠をめぐらして集住するかたちをとっていますが、それらは短期間で集落が移動・廃絶しているのが特徴です。その後、弥生時代後期になると扇状地の集落は環濠を持たない小規模なものに分散してしまうようですが、今度はさらに上流部に大型建物群によって構成される巨大集落、伊勢遺跡や下鉤遺跡が誕生していくこととなります。平野内でみるこれらの遺跡群の動態は、環境変



集落中央部で発見された大型建物

動や農業技術の変化、政治組織の発達、騒乱など紆余曲折とした歴史展開を体現した結果だと言えるのでしょうか。

中国の史書『漢書』地理志なかには、「楽浪海中に倭人在り、分かれて百余国を為す…」という記事がある。また『魏志』倭人伝のなかには、魏と外交関係にある「国」が日本列島内に30箇所ほどあるとの記述があります。しかし、そこに現れる「国」の実態やその形成過程については、史書に記されておらず、未解明な部分が多いのです。今回ここに紹介した下之郷遺跡は、紀元前一世紀頃に最盛期を迎える巨大環濠集落で、湖南平野に点在する遺跡群のなかでも中核的な役割を担った集落です。そして、この時代の「国」のあり方やその中枢を体現する象徴的な遺跡だといえます。下之郷遺跡をはじめとする、その後の集落展開を今後精緻に追うことで紀元前後の「国」の様子が浮かび上がるものと考えています。

### 参考文献

- 守山市教育委員会編 『弥生のなりわいと琵琶湖—近江の稲作漁労民—』サンライズ出版 2003年
- 守山市教育委員会編 『弥生のタイムカプセル 下之郷遺跡』守山市教育委員会 2001年
- 川畑和弘 『初期稲作と弥生集落』『日本文化のかなめ』 サンライズ出版 2000年

### 滋賀文化財教室シリーズ No.211号

発行年月日 2004年1月31日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525